

ガザミ類の種苗量産技術開発事業

島袋新功

本研究は、昭和56年度「栽培漁業技術開発事業報告書」で詳細を報告したので、その概要をまとめた。

1. 目的及び内容

ガザミ類の種苗生産放流による積極的な資源の増大を図るため、その種苗量産技術を確立する目的で、前年度に引き続き調査試験を行なった。その結果、ガザミ類の産卵生態の一部が明らかになった。また、タイワンガザミの種苗10万尾を生産した。

2. 成果の概要

(1) タイワンガザミ

①産卵期は3月中旬～10月。盛期は3月～5月で、この時期の抱卵親ガニは大きな個体が多く、抱卵率は高く、抱卵量も多い。雌ガニは体重約70g（甲幅約10cm）から抱卵する。抱卵量は親の大きさ及び時期により大きな差が見られ、10万～300万粒の幅がある。3～6月には越冬した1才親ガニ、7～10月にはその年の春に生まれた当才親ガニが主に産卵すると推定された。

②屋外10トン水槽にふ化幼生30尾/ℓ放養し、ワムシ、アルテミア、貝肉等を投餌し、止水、通気飼育を行なった結果、トン当たり5千尾の稚ガニを生産した（表）。

タイワンガザミの種苗生産結果（昭和57年、屋外10m³水槽）

飼育期間	幼生期間	稚ガニ生産量	生残率(%)	取り上げ稚ガニ令期	水温(°C)
4/29～5/18	16日	41,000尾	13.4	C ₁ ～ ₂	22.1～26.7
5/26～6/15	18日	59,000尾	19.7	C ₁ ～ ₂	22.1～25.7

(2) ノコギリガザミ

①沖縄市漁協に水揚げされたノコギリガザミの中から、天然産の抱卵親ガニ4個体を得た。得られた試料は少ないが、ノコギリガザミの産卵期は5～9月、個体当りの抱卵数は250～500万粒と推定された。

②ふ化幼生をタイワンガザミと同様な方法で飼育を試みたが、ゾエア3令期までに全滅した。

3. 今後の課題

- ①タイワンガザミの放流サイズ、場所、効果等の放流技術を検討する。
- ②ノコギリガザミの抱卵親ガニ養成、種苗生産、放流等の技術確立を行なう。
- ③加温施設利用による幼生飼育時の水質の安定化を図り、種苗生産歩留りの向上と安定化を検討する。